

愛の教え 新島襄の説教から

講演	山本 真司〔やまもと・しんじ〕
講師紹介	同志社国際中学校・高等学校宗教センター主任

はじめに

まず最初に聖書の言葉をひと言。

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」（ヨハネによる福音書3章16節）。このキリスト教の聖書を前提にすることで同志社スピリット、新島襄スピリットを考える手立てになりますので、最初に読ませていただきました。

越川先生よりご紹介いただきましたように、私は大学の斜め向かいにあります同志社国際中学校・高等学校で教員をしています。まれに大学で同志社科目をとっている卒業生が「先生、新島襄っていう教授は講義をもっていないようです」と、このような苦情を漏らします。その卒業生には、新島襄はすでに召されたことを改めてお教えします。同じように、「同志社はカトリックですか、プロテスタントですか」とも、結構尋ねられます。簡潔にお答えしています。また、卒業生は学内の重要文化財のチャペルで結婚式を挙げることができますので「山本神父様、結婚式をお願いできませんか」と依頼してくださるのですが、私は神父ではなく牧師です。その卒業生には牧師と神父の違いを説明します。ということも含めまして、同志社スピリット、新島襄スピリットと申しますが、私たちが原則として押さえておかなければならないことを本日お話しいたします。

新島襄という牧師、教師、あるいは教職者は、実はそんなに有名ではありません。学内においても認知度は低いです。この学校がキリスト教の学校であり、福音教会というベースがあることを知らない先生もたくさんおられます。生徒の中にも多いです。その原因として、彼には主著がないことです。同時期にお互いライバル視していた慶應大学を創立した福沢諭吉の『学問のススメ』のような日本国民が知るような主著がなく、さらに早世したため認知度が低いからだと思います。ですが、その志は新島の説教や講演メモを集約した「『新島襄全集』2 宗教編」で読むことができます。全部で73あります。内、72タイトルが日本語で、残り1タイトルが英文で収録されています（文末に聖句一覧表掲載）。

特に英文に関しては完全原稿で書いています。始めにご紹介したヨハネによる福音書3章16節をもとにした説教です。

聖書の引用箇所傾向は、ヨハネによる福音書の引用が多いので、おそらく新島が好んだ聖書箇所でしょう。続いてマタイ、ルカ、マルコと続きます。それ以外は、アダムとエバが出てきまず創世記、出エジプト記、ダニエル書、箴言、詩編などの旧約聖書、パウロのコリントの信徒への手紙等、圧倒的に福音書であることは、時代背景より旧約の日本語訳の聖書がなかったということもあるのでしょうか。

最新のキリスト教界大ニュースに、興味はおありですか。5月20日、教皇フランシスコは6月29日に14人の新しい枢機卿を親任することを発表されました。その中に日本人として6人目の枢機卿、前田万葉大司教（大阪）が含まれています。トマス・アクィナス前田万葉氏。1949年長崎県南松浦郡新上五島町仲知に生を受けられました。

長崎は遠藤周作原作、マーティン・スコセッシ監督で再映画化されたキリシタン弾圧の物語「沈黙—サイレンス—」の舞台、そして、潜伏キリシタンで知られる土地でありますので、潜伏キリシタンの流れを汲む方なのではないかと推測しています。コンクラベ（教皇選出会議）の投票権をもつので、日本人初めての教皇になる可能性があるのです。

余談ですが、映画でもありましたように、迫害されている者に対し、何も救いもせず神は沈黙しているのだらう、とは、キリスト教徒の長年の問いかけと悩みです。「しばらくしたら戻る」「しばらくしたら救われる」として人々は待っている。ところが、神の単位と人の単位は違うのです。たとえば、違う文化に触れると「しばらく」の単位が違うのと同じです。

昨年のことなのですが、日本ではそれと取り上げられませんでした。実は、同志社を含めて福音教会にとっては区切りの年でした。宗教改革500年、マルティン・ルターが「九十五条の論題」を発表してから500年の記念の年でした。

ヨーロッパではブレイモービルのルター人形や限定キャンディーが発売されるなど盛り上がりしましたが、それはキリスト教徒でないデメリットが多いということです。日本と違い、キリスト教徒であることがメリットとなる国や地域であるということです。

簡単に宗教改革の流れを説明しておきます。

数年前にルーテル教会とローマ・カトリックは共同声明「From Conflict to Communion」（争いから交わりへ）を発表しています。また、2016年にはスウェーデンのルンド大聖堂で次のように世界に発信いたしました。

わたしたちは神に祈ります。カトリックの者たちとルーテルの者たちがイエス・キリストの福音を共に証しし、神の救いの働きを受け入れるべく人々を招くようになることを。わたしたちは共に奉仕の務めに立って、特に貧しい人々のために、人間の尊厳と権利とを高め、正義のために働き、あらゆる形の暴力を斥けることにおいて共に奉仕に当たることができるよう、霊の導きと勇気と力を神に祈ります。尊厳、正義、平和、和解を切に求めているすべての人々にわたしたちが近づくようにと、神は呼び掛けておられます。（一部省略）暴力や過激思想を終わらせるよう、わたしたちは声を挙げねばなりません。知らない人々を受け入れ、戦いや迫害のゆえに逃れることを強いられた人々に助けの手を差し伸べ、難民や亡命を求める人々の権利を守るよう、共に働くことを強く求めます（「ルンド共同声明」日本福音ルーテル教会ブログ2016年11月10日より）。

皆さんにお願いしたいのは、少なくとも同志社で学ぶ人たちに、こういったことに興味をもっていただきたい。世界でどんなことが起こっているのかに関心をもっていただきたい。世界を読み解く鍵は同志社の同窓生でもある佐藤優も言っているように、キリスト教の、または宗教的な理解が必要となります。我々の魂の動き方は決して見えないものではなく、形にあらわれてくるものであることを知っておいてください。

17世紀から20世紀初頭まで続く対立と無視は、1910年の福音教会諸派によるエジンバラ世界宣教会議や1962年から開催された第二バチカン公会議を経て、いわゆるギリシャ正教会を含めて、「エキュメニズム（教会一致運動）」へと、実を結んでいきます。「エキュメニズム」ということばは「家」を意味する「オイコス」というギリシャ語から派生した「オイクメネー」（人の住む全世界）を語源としています。公会議（シノドス・オイクメネー）はしかしながら、民族や国家をこえるものの、「キリストによる」という限定が掛けられています。因みに、エコロジーに関しては、フランシスコ教皇は、回勅「ラウダート・シ」を公表しています。回勅の表題を、アッシジの聖フランシスコの「太陽の賛歌」の中の言葉「ラウダート・シ、ミ・シニョーレ」（「わたしの主よ、あなたは称えられますように」の意）から取られています。そして、その副題を「ともに暮らす家を大切に」つまり地球を大切にしています。英語の“ecology”は、1866年にドイツのダーウィン主義生物学者エルンスト・ハッケルにより作られたギリシア語のοἶκος（オイコス＝ポリスの市民を家長とする家政機関共同体）とλογος（ロゴス＝理論）とを組み合わせたものです。

さて、本日の主題は「愛の教え 新島襄の説教から」でございます。ひと言で言えば、新島襄という人は愛の人だったのです。愛の実践家と言っても過言ではありません。「愛をもってこれを貫く」という1886年5月30日の仙台教会での説教草稿に認められることばに収められていると言えるでしょう。「耶蘇教ハ何ソト人間ハレタレハ答テ曰ハン、愛以貫之」（新島襄全集編集委員会編『新島襄全集』2 同朋舎出版 1983年 178頁。以下②178）。キリスト教会の礼拝で語られる説教は、一回性、共時性、同時性を原則としています。コンサート（の一種）と言っても過言ではありません。聖書を解き明かす説教者と聴衆が同時に同じ空間で神の愛と恵みとを共有するというのです。まことに僭越至極、不遜なのですが、残されている唯一とっていい新島襄の説教を共有したいと考えました。原文は英語なのですが、北垣宗治先生が日本語に翻訳され、『新島襄教育宗教論集』に収録されたテキストを用いさせていただきますにいたしました。言語はそれぞれに特性があり、適性をもって私は思っています。日本語について私は人を敬うのに適した言葉だと思っていました。すると同じようにそう思っている方がいました。エリカ・ケートというドイツのソプラノ歌手です。彼女の言語に対する考えを語ったエピソードがあります。「ドイツのソプラノ歌手エリカ・ケートさんは言葉の響きや匂いに敏感であつたらしい」と彼女との歓談の折に語った比較論を「劇団四季」の浅利慶太さんが自著に書き留めています。

彼女は、イタリア語を「歌に向く言葉」、フランス語を「愛を語る言葉」、ドイツ語を「詩を作る言葉」と評した。日本語は、浅利さんの問いに彼女はこう答えたという。「人を敬う言葉です」（『時の光の中で』 文芸春秋 参照）。

さて、詳細は配布いたしました「解題」をご覧ください。

継承された73編の説教と断片、メモを手掛かりに同志社を支える新島襄の愛の教えを俯瞰していきたいと思うのです。

The verse, which I have chosen for the text seems so prominent and so striking on the pages of the New Testament as to arrest the attention of many, many readers of God's word. It does beautifully unfold the mystery of the Gospel truth and explains plainly why God did spare his bosom child to the world and on what condition this sinful race could obtain eternal life. This is indeed the essence of the Gospel story, and the key note to the mission of our Saviour on the earth. (⑦119)

私が選びましたこの聖句は新約聖書の中でも大層目立つ、特異なものでありまして、数多くの聖書の読者がこれに惹きつけられてきたように思います。この聖句は福音の真理の神秘を美しく解き明かすものでありまして、何故（なぜ）神が愛する御子（みこ）をささ惜みせずにこの世にお与えになったのか、またいかなる条件の下でなら、この罪深い人類は永遠の命を得ること

ができるのかという問題を、はっきりと説明するのであります。まことにこれこそは福音物語の真髄であり、地上で私たちの救い主が果された役割の意味を解くカギであります（同志社編『新島襄教育宗教論集』 岩波書店 2010年 143頁）。

神の形、人間の男として、イエスを世に送られた。
イエスの名について、ナザレの町の大工のヨゼフの子であり、キリストは、救い主の意味です。つまり、「イエス・キリスト＝救い主イエス」という意味です。
自分自身を救えない＝愛の原点、他者に向けた愛。人のせいにしない愛。
最終的に行きつくエピソードは「自責の杖」ということになるでしょう。ところが原罪について、宣教師との齟齬がありました。

ニコライから見た同志社

日本ハリストス正教会創立者として知られるニコライは京都に神学校を作りたかったが、人が集まらなかった。そこで、函館の教会と一緒にあった新島に面会を求めたが、新島襄は一度も応じなかった。どうしてか。

“Japan Daily Mail”の社説‘The Problem of High Class Education by Missionaries (contributed)’〔宣教団による高等教育の問題点（寄稿）〕には次のことが書いてある。日本人の新島〔襄〕によってアメリカの資本で創立された京都のキリスト教の大学〔同志社〕は、世俗の学校になる。もしそこでキリスト教が教えらるるのであれば、同じように宣教や講義というかたちで仏教も教えらるるだろう。しかし、それでもやはりこの大学はアメリカの宣教団の資本で成り立っている。その資本はすべての外国人教師の、そしてほとんどすべての地元の教師の給料を賄っている。学校運営は日本人が行なっている。学生たちの間には、いかなる宗教的な志向もない。ただ、一般教養を身につけたいだけなのだ。だから疑念が生まれ、不満が出た（『宣教師ニコライの全日記』4 教文館 2007年 89頁）。

つまり、ニコライにとって新島襄の創った同志社は意に添わない、ということであったので、もしかしたら、彼の同志社に対する考えをどこかで新島が漏れ聞いたのかもしれませんが。
確かにアメリカの資本で創設されたが、これまで熊本バンドなど多大な努力があっここまで歩んできたのであって、決してニコライのいうように乗っ取ったわけではなく、ずっとキリスト教主義を貫いてきたのです。ですから新島としては会わないことで、彼とは争わないことを選んだ。あえて、争わないというのも「愛」の姿であったのだと思います。

愛にしっかりと立つ

1875年11月29日の朝、同志社は祈りの会で始められました。新島の祈りは深く、熱く、愛に満たされていたと伝えられています。与えられた聖書のことは新島が同志社の将来を思いつつ病気で倒れ、臨終の床にあった時に読ませたものです。

「どうか、御父が、その豊かな栄光に従い、その霊により、力をもってあなたがたの内なる人を強めて、」（エフェソの信徒への手紙3章16節）
「信仰によってあなたがたの心の内にキリストを住まわせ、あなたがたを愛に根ざし、愛にしっかりと立つ者としてくださるように。」（同17節）
「また、あなたがたがすべての聖なる者たちと共に、キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解し、」（同18節）
「人の知識をはるかに超えるこの愛を知るようになり、そしてついには、神の満ちあふれる豊かさのすべてにあずかり、それによって満たされるように。」（同19節）
学校は知性の砦ですが、新島はあえて、その知性を乗り越える愛を人生の最後に確かめております。知識を育むことができることは学校にとって、最低限必要な要素ですし、知識を得ることのできない場所を学校と呼ぶことはできないでしょう。
私たちの同志社はさらに、魂をも育もうとしております。私たちは生きている限り多くの試練を与えられ、将来に不安を感じなければなりません。しかし、私たちには「良心碑」を始めとした、立ち返るべき、意味のある教えが創立以来受け継がれていることを忘れずに、日々の学びを謙虚にしていきたいものだと思います。そして、その謙虚さが人間の知識を超える神の愛だということを想い起こしたいと存じます。

「諸君とともに過去を追想して記念としたいのは、昨年私が不在中に同志社を退学させられた人々のことである」。新島襄は1885年創立十周年記念会の祝辞を涙ながらにこのように始めたと伝えられております。「本当にかれらのために涙を流さずにはいられない。彼らは真の道を聞き真の学問をしていた人であったが、ついに退学させられることになった。諸君よ、人ひとりは大切である。ひとりは大切である。過去はすでに過ぎたことなのでどうしようもない。しかし、今後については私たちはまことに用心深くありたいものである」。
創立を祝う式典で、「退学した彼らは、今、どうしているのだろうか」と告白する新島校長に、手元にいる99匹の羊よりも群れから外れた、迷える1匹の羊に目を向けた良い羊飼いの姿を重ねることができないでしょうか。新島襄は決して、ゴチックで教科書に載るような著作や成果を残した教育者ではありませんでした。しかし、これまで同志社に学び、今、学んでいる多くの同志に、強い印象と痕跡を残しつつづけている教育者でございます。木戸孝允は日記に「頼むべき友 信頼できる友人」と書いております。
「これまでのわが同志社の歴史もまたこれと同じである。実に困難のなかをひたすら神によってこのような進歩をなしたのである。しかし、本日十周年記念会も決して喜んでいる時ではない。まだ目的の港に到達していないのである。現在現われている結果はまだ完全なものではなく、数百年後でなければ真に喜べる時代とはならないし、真に見るべき成果は出てこない。しかしながら、わが同志社はこの進路を決して変えることはないのである」（『現代語で読む新島襄』 丸善 2000年 184頁）。わが同志社はこの進路を決して変えることはない。この進路というのは、ひとりを大切に、神に委ねられた教育を推し進めていくということに他ならないのではないのでしょうか。

ところで、わたしたちの同志社は規則が少ないことが特徴の一つだと思います。それは新島襄が徹底して「法三章」を理想としたからです。法三章というのは、史記の引用ですが、漢の劉邦が秦を滅ぼした後、秦の始皇帝が定めた厳しい法律をやめて、殺人、傷害、窃盗を罰する簡単な法令を定めた故事です。法治万能主義で人を縛ると規則を恐れて人間はその枠の中で小さく生きなければならない、自由な発想が阻害される、所詮人間の作る規則などというものには限界があるというのです。反対に、規則はできるだけ少なくすることで、お互いの矮小な人生観や世界観に捕われずに自在に発想することで社会は進歩するということでしょう。新島襄は「弱く、小さなもの」を大切に考えました。同時に、「強く、大きなもの」を排除しませんでした。学校や組織の枠からはみ出そうとする未来の利器を、学校から排除したり、型にはめ込もうとすることを最も嫌ったのです。

同志社は大きな学校になってまいりました。しかし、新島の抱いた神の愛に満たされた理想の学校は、未だに、その道半ばなのではないでしょうか。いま一度、神の愛に根ざした教育理念と、人を愛するたくい稀な情熱とを想い起こしつつ、弱者や少数者を大切に教育機関であり、小さな枠に捕われない学園へと歩みを共に進めたいものだと思います。

我が校の門をくぐりたる者

「我が校の門をくぐりたる者は、政治家になるもよし、宗教家になるもよし、実業家になるもよし、教育家になるもよし、文学者になるもよし、且つ少々角あるも可。奇骨あるも可。ただ、かの優柔不断にして安逸を貪り、苟も姑息の計を為すが如き軟骨漢には決してならぬこと、これ予の切に望み、ひとえに希うところなり」。

ヨハネによる福音書8章33節には「わたしたちはアブラハムの子孫です。今までだれかの奴隷になったことはありません。『あなたたちは自由になる』とどうして言われるのですか」と言うユダヤ人が出てきます。この人たちは分からないのです。イエスが語る自由がどのような意味をもっているのかということが。毎日の生活が当たり前だと思っている人たちは分からないでしょう。少しだけ想像力を働かすことができれば、私たちの当たり前の日常は実に多くの人たちの努力に支えられていることに気づくはずなのです。ユダヤ人たちは先祖が偉大なアブラハムなのだから、自分たちも立派だと思いつ込んでいます。

確かに、両親やおじいさん、おばあさんが立派な人なのでチャホヤされる人もいるかもしれませんが。本当に賢い人はそこで立ち止まって考えるのです。どうして私は大事にされているのだろうか。

京阪神で同志社の生徒、学生です、と言え鼻が高いのではないのでしょうか。大人だって、同志社で働いています、と言え結構、信用されるのです。どうしてでしょう。それは今まで同志社の看板を背負って努力を惜みず、支えてきた人たちがいたからなのです。そして、今、私たちがその伝統を引き継ごうとしています。同志社という学校の伝統と周りの人たちの評価を作り上げるのは私たちです。どうか、あなたがた一人ひとりが同志社の誇りを担う人になる努力をする決意を新たにしたいと思ひます。エリートのプライドをもつことは決して間違ったことではありません。選ばれた人にふさわしい実力を着けるために、私たちは学んでいるのです。そして、その力を正しく用いること、そのことに自信をもつことは豊かな人生を歩む糧となるに違いありません。

新島襄は日記に次のように記しています。
「磨く前のダイヤモンドのようであれ。内に輝くものがあるならば、荒削りの見かけを決して気にしてはいけない」（『現代語で読む新島襄』 178頁）。

※引用しました出典の一部につきまして、読みやすくするため平仮名、現代仮名遣いで表示しております。